



保健だより

2021.5.1 南青山病後児保育室

端午の節句とこどもの日

端午の節句は元々は中国から伝わったもので、こどもの成長を願う色々な意味が込められています。「端午」の「端」は初めという意味、「午」は五に通じるということで5月初めの5の日を表しています。当初は旧暦の5月5日が端午の節句でした。

端午の節句が伝わった奈良時代、邪気を払うとされていた菖蒲をお風呂に入れてしょうぶ湯にしたり、よもぎとともに軒に挿したりしました。

また、中国ではこの日に高名な詩人にまつわる故事に基づいて「ちまき」を食べる風習があり、日本でも同様にちがや（茅）で餅をくるんだ「ちまき」を食べるようになりました。

江戸時代になると政治の中心が京都から江戸へ。

菖蒲と尚武（武事、軍事を尊ぶこと）の音が一緒であることで、しょうぶ湯や軒挿しをする5月5日は男の子を祝う祭事へと変わっていきました。

幕府では将軍に男の子が生まれると馬印（武将が戦場で自分の存在場所を示すために掲げる長柄に印をつけたもの）やのぼりを立てて祝いました。

やがて一般庶民の間でも、男の子のために武者人形を飾ったり鯉のぼりを飾るようになり端午の節句は男の子が強く育つように祈りを込める日となりました。

これが今も引き継がれて、5月5日が男の子の節句となったのです。

また5月5日は「こどもの日」でもあります。「こどもの日」は1948年に制定された国民の祝日で「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」事が趣旨とされています。こどもみんなのお祝いの日であると共にお母さんに感謝する日。皆が楽しく過ごせる日でありますように。

菖蒲湯

強い香気があり、この香りの強さが不浄を払い、邪気を遠ざけてくれると言われていました。

5月5日近くになると、お花屋さんや八百屋さんで多く売られています。



ちまき・柏餅

ちまきは香りのある葉で包むことから邪気を払う意味があり、日本では平安時代に宮中で端午の節句の厄除けとして用意されるようになりました。

柏の木は新芽が出るまで古い葉が落ちないため、そこに子孫繁栄や家の存続の願いを込めて端午の節句に食べられるようになったと言われていました。

